

彦根城博物館所蔵『今昔物語』 卷一の本文の位置づけ

中根 千絵

一、はじめに

論者は、『説林』53号において、彦根城博物館所蔵『今昔物語』（全巻、表紙の題には『今昔物語』と書いてあるが、内題には『今昔物語集』とある巻もある。）の紹介を行ったが、その際、本の空白部分の分析、流布本系共通脱文の分析から、彦根城博物館所蔵『今昔物語』は、内閣文庫本Bに近い流布本系の本であり、内閣文庫本Bより良い本であろうと論じた。しかし、その位置づけが正しいかどうかは、諸本との一語一語の比較を経て、初めて、立証されるものである。そこで、今回、巻一について彦根城博物館所蔵『今昔物語』の本文を他の諸本と比較することにより、彦根博物館所蔵『今昔物語』の位置づけを試みることにした。但し、諸本の収集は、いまだ、その途上にあり、今回は、旧日本古典文学大系『今昔物語集』の校異と頭注から必要な部分を抜き出す形で、諸本との比較を行うこととした。

その分析の結果については、「おわりに」の項に記すこととする。

二、彦根城博物館所蔵『今昔物語』 卷一の本文異同

凡例

一番上の段は旧日本古典文学大系のページと行、次の段は彦根城博物館所蔵本の本文、次の段は彦根城博物館所蔵本と同じ本文を持つ本の種類である。(但し、異体字などの字形が異なるものについてはこれに含め、その都度指摘した。)★印は彦根城博物館所蔵本独自の部分であり、その部分については諸本の例を示した。旧日本古典文学大系に載る考察は必要に応じて「」に入れて付した。

各本の略語は次の通りである。

底―旧日本古典文学大系『今昔物語集』の底本(東大本甲)(旧日本古典文学大系『今昔物語集』の底本が現在の諸本のうちの古態本にあたると思われることから、底の字を使うことで、それが一見して明らかとなるようにした。)

北―東北大本 野―野村本 以上古本 乙―東大本乙

A―内閣文庫本 A B―内閣文庫本 B C―内閣文庫本 C 以上流布本 東大本甲を除く諸本―諸

彦―彦根城博物館所蔵本 大―旧日本古典文学大系

卷一第一話

五二四 所二

乙ABC

5 天ハ

諸(底北Cは人を補入)

5 眼瞬ノ

★「眼瞬ク」AB底北野乙大(底北野乙 瞬の旁は舞)「眼瞬ノ」C

6 萎ス

乙ABC(Bはヌイ、Cはヌと朱傍)

8 不替サルニ

底北野B(Bは不とサルとにナシイと朱傍)

卷一第二話

- | | | |
|------|----------|-----------------|
| 8 | 居ス | 乙ABC |
| 9 | 現シ給ヲ見テ | 野(ヲにウと朱傍)乙ABCは脱 |
| 11 | 生ナムトス | 乙ABC(Bのムはン) |
| 13 | 思ヒ定給フ | 乙ABC |
| 15 | 夫人右ノ脇ヨリ | 諸(Cは人の右下にノと傍書) |
| 五三 4 | 胎ノ中ノ | 諸 |
| 4 | 光ヲ現セル | 底北野B |
| 6 | 轉輪聖 | 乙AC |
| 五四 3 | 充テ満テリ | 北野(充は異体 充と朱傍) |
| 8 | 下ニ七步行テハ | 底北野B(底北野のニは朱筆) |
| 9 | 衆生ニ | 諸 |
| 13 | 清浄水ヲ | 乙ABC |
| 五五 1 | 希有事ヲ | 乙ABC |
| 2 | 大王来リ給ヘルヲ | 乙ABC |
| 3 | 我ヲ見ヨト | 底北野B |
| 4 | 太子ヲ懷テ | 野乙ABC |
| 6 | 大王 | 乙BC |
| 8 | 彼ノ | 野乙ABC |

卷一第三話

11 軽メ奉ル
14 夫人父

A
乙A B

五六 3 在城受樂語

A B C

6 摩訶摩

★「摩訶那摩」底北野B大「摩那摩」乙A C

7 有り

A B C

14 陸ヒ給ヤト

A B C

15 暖メ給フ

諸（野は暖歟と朱頭注、Aは不審紙を押ししたり、Bは娛カと朱傍）

五七 4 拜シ給

乙A B C

5 遣ヌ

乙A B C

7 其時

B C

15 道ヲ揮ク

乙A B C（Bは拂テイと朱傍、Aは不審紙を押ししたり）

五八 2 病人也

★「病ヒスル人也ト」底北野乙大「病ヒスル人也」A C「病ミタル人也」B

3 飲食スレトモ

乙A B

9 歎キ給フ

乙A B C

10 喚メ給フ

底北野乙A B（Bの喚は異体の変 喚キイと朱傍、Aは不審紙を押ししたり）

13 樂ム

乙A B C「樂フ」底野大「樂テ」北（テにフと傍書）

15 世間ノ駄ヒ

「諸本多く送りがなムに従うのはタノシ（バ）ムとよませるつもりであろうか。」
乙A B（Bはノにヲ歟と朱傍）

五九 3 曠ク給フ

諸 (底の曠は変、即ち日偏)

5 輦ニ

北野乙底大「輦」は「輿」と同じ

9 死ト云ハ

底北野 B

11 死ス

諸

13 死ヌルカ

底野

14 返行ヌ

A B C

16 聞ク此レヲ見ツ

野乙 A C (Cはレなし)

六十 1 問給テ

乙 A B C

5 者共ノ

乙 A B C

9 園ニ

乙 B

12 答云ク

底北野 A B

12 我ハ皆

諸 (Cは皆に此カと傍書)

14 不目出ス

底北野乙 (北は不の上に挿入符 色ニ一歟 真清と傍書)

卷一第四話

六一 13 唯願クハ

A B C

14 解脱セシメムカト

北野乙 A B C (Bのムはン カの左傍に朱圈点)

15 金剛山ノ

乙 A B C

六二 1 四ノ門

底野 B

3 一二ハ

野乙 A C

10	10	9	9	8	7	7	5	5	4	六三 4	16	11	9	8	4	4	3
先老病死	誓ヲ	自然ニ	城ノ北ノ門ヲ	今復然也ト	諸佛	其時ハ	捷陟	来ヌ	賊ヲ	結便ノ	金蹄ニ	大小ノ便利ノ	諸ノ采女ノ	造リテ	失ヒツト	三八	二二ハ
乙ABC	底北野B	乙ABC	底北野B	★「今復然也ト」B「今然也ト」乙AC「今又然也ト」	乙ABC	「其時」乙ABC	★「捷陟」底北野乙大	乙ABC	底野B	乙ABC (Bは便に使イと朱傍、Cはノをヲと朱訂)	ABC	底北野乙	B	B	底北野B	北野乙AB	底BC

卷一第五話

- | | | |
|-------|--------|-------------------------------------|
| 16 | 阿羅邏迦蘭 | 底 |
| 13 | 跋河仙人 | 諸 (Bは河に伽いと朱傍) |
| 11 | 居へ奉ル也 | 乙 |
| 六五 11 | 敬申サク | A B C |
| 10 | 宮ニ | 底北野 B |
| 12 | 至テ | 諸 |
| 13 | 太子ニ随テ | 諸 |
| 六四 2 | 捷陟 | ★「捷陟」底北野乙大 (北は同、野は金蹄イと朱傍) 「金蹄」A B C |
| 2 | 蹄ヲ舐テ | 諸 |
| 6 | 死メ | 乙 A B |
| 6 | 生シヌ | 底乙 A B C (底はシをレと朱訂) |
| 9 | 莊嚴ノ具ヲハ | 底野 |
| 11 | 諸天 | 北乙 A B C |
| 13 | 往昔ノ | 底北野乙 |
| 15 | 敏也ト | 底北野 B |
| 15 | 敏カ為 | 乙 B |
| 六五 1 | 太子 | 乙 A B C |
| 4 | 蹄ヒ滯ヒ | 底野 A 北 (北の蹄・滯は変、Aは滯ヒ不審紙を押ししたり) |

六六 2 捷涉ヲ

★「捷涉」底北野乙大（野は金蹄イと朱傍）「金蹄」ABC

2 返ヌ

北野ABC

3 悶絶躰地

ABC

5 有セ不奉ト

AB

8 阿羅同仙人

★「阿羅還仙人」諸（還に底北は右傍に朱圈点、Bは暹イと朱傍）「阿羅還仙人」大

9 無上正直ノ

★「無上正直ノ」諸大

11 受クト云ヘトモ

乙AB

12 爰ニ来給ヘリ

乙B

13 實ヨリ

底北野

六七 2 持チ

野ABC

2 不善ノ法ヲ

底北野B

5 勝タラム位ヲ

底北野B（Bのムはン）

6 仙人ニ別給フ二人ノ

底北野B

仙人

8 迦闍仙

★「迦闍仙」底大（底の草冠は後筆の如し 蘭は異体即ち東を車に作る 陣の陳お

けるが如し）「迦闍仙」北野乙AC（闇に野は蘭、北は蘭の変と朱傍、）

10 一麻米ヲ

乙ABC

11 満ヌ

底北B

六八 1 秣力牛

★「秣牛」底野（底は秣歟、野は秣歟と朱傍）「秣牛」北（秣歟と傍書）「秣牛」乙

A「秣力牛」B（秣力を消し牧と朱傍）「採牛」^{サイキツ}C「秣牛」大

卷一第六話

2 供養シ奉ヘシ 乙ABC
 2 自然ノ B
 4 身ノ光リ 諸

六八 12 名ツ

乙AB (Bはツの下にクと朱補)

14 成給ハム時ニ

★「成給ハム時ニ」AB「成給ハム時」底北野乙 大(北は時の下にニと補入)は脱

六九 14 毫シヌ

乙B

14 涎ヲ

乙ABC

15 行歩

乙ABC

16 汝ヲ

★「汝ヲ」底北野大「汝ヲ」乙ABC (Bはヲの左傍に朱圈点、Cは始めシと書き
て更にヲと重書したるものの如し)

七〇 1 善修シテ

乙AB

3 我カ果報ヲハ汝チ

★「我カ果報ヲハ天地ノ」底北野B大 (Bはカを朱括で囲みイと朱傍)「我カ果報ヲ

知レリ天地ノ

天地ノ」乙A「我果報ヲ天地ノ」C

8 悩乱セサル

乙ABC

9 持テ

諸

10 手金剛杵ヲ取テ

★「手ニ金剛杵ヲ取り」底北野大「手金剛杵ヲ取り」ABC「手金剛許ヲ取り」乙

10 或ハ龍ノ頭

B

12 一毛モ

乙ABC

14 發シ 乙ABC
16 還テケリトナム ABC (Bのムはン)

卷一第七話

七二 4 妨ケ奉ラム為ト 乙AB (Bのムはン) ンの下ニトイと朱補
5 夜ヲ以テ 底北野B
6 如此キ 底北野
11 阿羅還仙 諸 (北Bは暹と朱傍)

卷一第八話

七二 3 彼五人 B
4 相共ニ 乙ABC
7 不成事ヲ 乙ABC
11 有キ 北乙ABC (北のキは古体のかな)
13 二字分欠 始命 諸大 二字分欠 次の「始命」は不明
13 語り傳ヘタルトヤ 乙ABC (Bはヤに也イと朱傍)

卷一第九話

七三 6 謀コソ 乙AB (Bはコにニイと朱傍) Cは脱
10 打碎ムトス 底

卷一第十話

13 出来テ

北ABC

13 獅子

流布本「師子」大 師は獅を音通

13 出来テ

底北野

14 大夜又ヲ

大 古本系統異体字「𠂔」に作る

15 カク様ニシテ

底北野A

15 外道負ケテ

乙AB

七四 7 與佛諍

ABC (ABCは諍)

4 語

諸

5 徒父也

諸 (底は、兄弟歟、北は、兄弟トと朱傍、野は父の下に兄弟と朱補)

7 此ヲ哀抱キ取テ

B

8 大ニ嗔ヲ成テ

北野乙B

13 可分給ト

B

14 蜜ニ

大 正字は「密」流布本系は「密」に作る

七五 1 厭寄ル

B (壓と朱傍 Bは寄)

1 飛ヒ詣ス

乙AB

6 手ノ指ノ

底北野B

7 疵スヲ癒給ヒヌ

B (スヲにナシイ癒に愈イと朱傍)

8 害シ奉ラムトス謀コソ乙B (Bのムはン 謀に本ノマ、と朱傍)

8 飛昇ス

乙ABC

11 ト云フ

乙ABC (Bはイ蓮華比丘^{スハ} 人^{トモ}二名^ニと朱傍、Cは此問闕字と朱注記)

12 墮ヌ

野B

12 其人タル穴

★「其ノ入タル穴」底北野大「其入タル穴」B「其ノ人タル穴」乙A「其人墮タル穴」C

卷一第十二話

七六 2 繼クヘカリシニ

乙 (クは傍書の如し)

2 成リタリトソ

底野

3 謀ラル、者

底

4 記請ヲ

★「起請ヲ」底北野C大「起記請ヲ」乙AB (Bは記を朱括弧で囲みいと朱傍)

5 如此シテ

乙ABC

12 桶ニハ

北乙ABC

12 米ヲ洗タル汁ノ

北乙ABC

13 女此レヲハ糸異様ナ

B (レヲにナシイと朱傍)

レトモ

七七 1 仏ハ

底北野 (底北野は佛)

3 見タルヤ

★「見タリヤト」底北野大「見タリヤ」乙ABC

4 見タルト

★「見タリト」底北野乙大「見タリ」ABC (Bはリの下かな一字空白)

4 尚少シ无ト

★「尚少シト」底北野大「尚少シキト」乙AB「高少シキ也ト」C (高を尚と朱訂也みせけち)

卷一第十二話

七八 1 立ッ

3 佛ハ

3 何況ヤ

4 无量也

6 由无シ事ヲ云ソ

6 又子

8 門前ニテ

9 前後ニ

10 箸

10 誠ヲ宣テ

11 火ニ焼ケ劔ニ貫カレ

給ト

13 歩ミ繼テ

15 供養シ奉ル毒

5 本ハ

5 佛ニモ

「本ハ」大

BC (BCは仏)

乙ABC

底北野B

底北野B

乙ABC

乙A

ABC

乙ABC

ABC (Bは後にナシイと朱傍)

乙AB

乙AB (Bはヲを朱括弧で囲みイと朱傍)

底北野B

底北野B

乙AB

卷一第十三話

七九 6 佛行給語

諸

10 何ノ故有テ

乙 A B C

11 随遂セリ

底野乙

12 不會ルト也ト

B

13 令

乙 A B (Bは今イと朱傍)

16 如此メ

A B

八〇 4 不見ル

B (ルを朱括弧で囲みイと朱傍)

4 満財カ娘

乙 A B C

5 問テ云ク

B

6 御弟ノ子ノ

乙 B

11 有ヌレト

底乙 B (底はヌをメと訂す)

14 白毫相

A B C

八一 1 忽ニ悪人来レリ

底北野 B (底北野 Bは忽)

2 未タ不知ヤト

乙 B

5 有ナムヤト

底北野

9 互ニ

乙 A B C (乙の互は異体)

9 出ス事

A B C

12 鋌

「鋌」C底北野乙 B A (鋌の旁底北野乙 Bは弟、Aは第、Bは不審紙を押ししたり)

12 鋌ヲ以テ

乙 B A Cは脱

卷一第十四話

- 12 鐙
- 13 刺セト
- 14 為シ時ニ
- 14 釵ノ崎ニ
- 15 鐙ノ崎ニ
- 16 文殊大士
- 八二 2 左右ニ

C 底北野乙 B A (釵の旁北野乙 B は弟、底 A は第)
 乙 B (乙の刺は異体)
 乙 A B C
 乙 A B 底北野 (底北野の崎は変 即ち旁は寄)
 北乙 A 底野 (釵の旁 北野乙は弟、底 A は第、崎の旁 底野は寄)
 A B C
 大 (内閣文庫本 C、右傍にサユウ、左傍にヒタリミキリという附訓を有す。)

- 八二 7 随遂シテ

底北野乙 (野は遂に逐と朱傍)

- 8 入給ヲ
- 9 三摩那道
- 2 城ノ人ヲ
- 11 令去
- 13 人ヲ計リ欺キ
- 14 沙門
- 15 池ノ側リ
- 八三 1 其時ニ
- 3 ト宣ク
- 4 地トハ成ヌ

乙 A B C (B はヲにフィと朱傍)
 乙 A
 底北野 B
 乙 A B C
 底北野 B
 乙 A B C
 底野
 ★「其ノ時ニ」底北野大「時ニ」乙 A B C
 乙 A B
 北 B C

4 刀杖

乙 B C

6 筭

★「築テ」底北乙大（底は築歟と傍書）「尋テ」A B C（Bは左傍に朱圈点）「等テ」野（ヒトシクシテと左傍訓）

6 咎テ懺悔シケリ

底野乙

6 城人

乙 A B C

卷一第十五話

八三 12 懷妊シヌ

流布本「懷任」大 任の正字は妊

14 此ヲ聞テ後ノ長者

★「此ヲ聞テ後長者」底北乙野大（後に底北野は彼イと朱傍、野は聞を問に作り聞歟と朱傍）「此ヲ聞テ彼ノ長者」A B C

15 者ノ許ニ

諸（Cは者の下に長者と朱補、Bはノ許ニを朱括弧で囲みイと朱傍）

16 宴シ給フソト

A B C

16 返給ヒニキ

底北野乙

八四 1 嫌ニムト

★「嫌マムト」底北野乙大「嫌テムト」A「嫌テント」B「嫌テ欺ト」C

4 聞奉ル

乙 A B C

8 死スル

乙 A B C

10 遣ス

乙 A B C

10 死ス

乙 A B C

15 御膝ノ

乙 A B C

八五 1 妄語シ給サル事ヲ

底北野 B

1 入りタリトナム

★「入レタリケリトナム」底北野大「入りタリケリトナム」乙A B (Bのムはン)
「入タリケリトナム」C

卷一第十六話

八五 4 為堀魔羅

諸

4 切佛指語

底北野乙

8 得タル如シ

乙A B C

9 會奉ヌ

北野A B C

11 不追付

A B

11 様无シテ

A B

卷一第十七話

八六 4 守門者ニ

乙A B C

4 努々

乙A B C

6 墮スレハ

諸 (底はスをヌと朱訂)

6 无限

B

10 飛来ス

底北野乙A (底はスをヌと朱訂)

12 寡ニ

A B C 底北野乙 (底北野乙の寡は異体の変、北野は寡と朱傍)

12 我カラ子ヲ

B

八七 3 在シ時八國ノ

底北野乙

卷一第十八話

- | | | |
|-----|---------|--|
| 13 | 羅睺羅 | ★「羅ゴラ」底北野乙大「羅睺羅」ABC |
| 12 | 彼ノ | 野乙AB |
| 11 | 墮ス | 乙AC |
| 9 | 身内ノ | 乙ABC |
| 8 | 此ノ二人一人ハ | B |
| 5 | 遇ヌ | 北野BC |
| 八八5 | 寢モ | 底野B (Bの取は最の上にウ冠あり、なお不審紙を押し家イと朱傍) |
| 15 | 朝暮 | 乙ABC |
| 12 | 学シム | ★「學シメムト」底北野大「学シメム」乙AB「学シテム」C |
| 12 | 出家セシメ | 乙ABC |
| 10 | 奉リテ | 乙ABC |
| 9 | 金錢ヲ | 乙ABC |
| 6 | 答ル | 諸(北の答は変) |
| 5 | 涙ニヲシテ | ★「涙ニツホ、ンテ」底(ツをヲンをレと朱訂しオホレテイと朱傍)「涙テヲホ、レテ」野「涙ニヲホシレテ」北(シにレイと朱傍)「涙ニヲホレテ」乙ABC「涙ニヲホ、レテ」大 |
| 3 | 乞ヒキ | 底野 |

八九	3	尼狗類國	A B C
	6	尼狗類國	A B C
	7	返給テ	乙 A B C
	7	出家セハ	乙 A B C
	10	服シテ	B C
	10	難陀ニ迫テ	乙 A B 「難陀ヲ迫テ」底北野 C 大
	13	閑ラレテ	乙 A B C
	15	御マシスシテ	★「御マストテ」底北野大「御マサスシテ」乙 A B C
九〇	1	此ノ間	乙 A B
	2	行程ニ	B
	4	樹ヲ拳テ	A B C (A B Cは擧)
九一	3	比スル	乙 A B
	3	百千倍ニモ鑊	A B
	4		「鑊」大 普通「鼎」と書く
	9	或ヲ持テ	A B C 乙 (乙の或は変)

「古本系統は上に助詞ヲがあるからセメテとよむべきだが流布本系統は助詞ニを用いるので迫の訓も又セマリテとすべきであろう。語法変遷の一端をうかがう事ができる。」

九一五 出家語

底北野乙

16 姨也

乙ABC (Bは不審紙を押ししたり)

九二七 不計給ハ

★「不許給ネバ」底北野大「不許給ハ」乙AB (Bはハを朱括弧で囲みイと朱傍)

「不許給」C

13 久ク住セム事

乙ABC (Bのムはン)

14 佛ヲ修行セシメテ

乙ABC (Bは法イと朱補)

16 佛始テ生給フ時ハ

B

九三一 至シ奉ルソ

乙AB

2 思有リ

★「恩多シ」底北野大「思有リ」乙AB「恩アリ」C

卷一第二十話

九三十一 題だけアリ

本文、諸本彦欠

卷一第二十一話

九四二 出家スヘシ

乙ABC

3 出家スヘシ

乙ABC

9 勸メテ

野乙ABC

9 出家セム事ハ

乙A

16 善キ衣服ヲ着

乙AB

九五 係テ

ABC

5 思 乙 A B
5 九人ヲ 乙 A B C
7 思ス 底北野乙

卷一第二十二話

九五 12 鞞羅羨王子

底北乙野 B (鞞の旁北は早、乙は早、野の偏は車、Bは に作り鞞イと朱傍)

14 采女共ニ

乙 A B C 「姪女ノ共ニ」底北野大

14 樂ム音

乙 A B

九六 1 命終ヌ

乙 B C

4 觀支多天

A B C

6 其命二万六千歳

C

7 福

乙 A B C (C傍訓フクヲ)

9 不可思議也トナム

乙 B (Bのムはン)

卷一第二十三話

九六 13 詣佛所

底北野

九七 11 何カ有ル

B

九八 5 畫テ

乙 A B C

7 一補ノ

諸 (野は補に鋪敷と朱傍)

7 畫シテ

野乙 A B C

7 畫像法ハ

A B C

8 次ニ可書ク次ニ

B (可書ク次ニを朱括弧で囲みイと朱傍) 「次ニ可書シ次ニ」底北野大「次ニ可書ノ次ニ」乙A「次ニ可書ト次ニ」C (次ニ可書トを朱点線で囲みたり) 「このままでは文意が通じない。一句脱落したものと見るべきか。」

9 二行ニ

乙 A B C

12 云ク

乙 A B C

九九 1 何ノ

乙 A C

2 量ラハ

A B C

2 其言ハ

乙 A B C (Cはハ朱筆)

4 不信シテ

乙 A B C

6 送リ至テ

乙 A B

7 身毛

乙 A B

7 恐テ怖ル、夏

B

8 其文ヲ

乙 A B C

8 返ス

乙 A B C

13 可遣ル

北野乙 A B

14 影勝王ニ

大「このままでは文意通じがたい。」A本では左傍に「仙道王カ」と朱書

14 得タリト云

乙 A B C

15 房ヲ可造

B

16 阿羅漢ヲ得

底北野 B

一〇〇1 法ヲ説ハ吏ヲ

乙A (乙のハは傍書)

7 頂髻太子

A 底北野乙C (A以外の髻は変、彦も変)

10 報セムト為ニ

諸大

「もと「報ゼムト」といわんとして途中で「報ゼム為ニ」といいかえた新旧二表現が未整理のまま存置されたものである。また、為ニはスルニの意が含まれているものと解することができれば、このままでも通ずるであろう。」

11 拳テ営ム

乙ABC (乙ABCは營)

13 返ヌ

乙B

16 道ニ趣ク

乙ABC

一〇一4 其時

ABC

6 不知

BC

7 蒙レリトナム

乙ABC (Bのムはン)

卷一第二十四話

一〇一9 題だけアリ

本文、諸本彦欠

卷一第二十五話

一〇二3 成ルト云トモ

乙AB「成ト云トモ」C「成ル云トモ」底北野大

古本は皆トの字を欠く。「関西方言では現今でも普通の表現。」

6 十三年

乙ABC

- 9 何クノ 乙ABC
- 11 主ニ 野乙ABC (乙傍訓シユ、C傍訓アルシ)
- 14 貯シ事ハ 乙ABC
- 15 端巖美麗 大
- 一〇三二 後 乙ABC
- 4 隣國ノ王将獵ニ 乙AC
- 5 非ヤ 乙ABC
- 5 其時 乙ABC
- 8 死スルニ 北乙ABC
- 10 出家セルト 乙ABC
- 11 半國ヲ護ラム A
- 12 國土モ 諸
- 12 汝等 乙ABC 「汝等ヲ」北(ヲみせけち)「汝等ノ」底野大ノを原本以来の古形と認める
ならば「を初め」の意であろう。
- 13 佛ニ成サムト 乙ABC (Bのムはシ 乙ABCは仏)
- 13 語り傳ヘタルトヤ 諸(野のトはクに近し)
- 卷一第二十六話
- 一〇四 3 道心ヲ發シテ 乙ABC

	3	御許ニ	乙 A B C
	12	大虫	乙 A B C
	14	自ラ完村ヲ	乙 A B C
一〇五	1	敷テ居ス	乙 A B C
	4	大虫	A B C
	6	後者トシテ	A B C
	8	犯シテ有ルト	北乙 A B
	9	前生	乙 A B C
	10	盗ニ	乙 A C
	10	滅セル者	流布本「滅セル者ヲ」野「滅セル者ノ」大
	11	大狐ト	乙 A B C
	12	生シ	乙 A B
卷一第二十七話			
一〇六	10	上臈	乙 A B C
	11	捨テ	乙 A B C
	13	何故有テカ	乙 B
	13	哭居タル	乙 A B C
	14	随ヘムト	大

東大本乙でおくりがななし。東北大本はハムと送る。「これらは何れも他動詞であ

ることが理解できなかつたためであろう。」

14 衣食乏シ

A C

16 御弟子達

乙 A B C

一〇七 2 成ル事ハ

乙 A B C

8 過去ノ

底北

10 申シテ

乙 A B C (テにBはタリ、Cはキと朱傍)

10 不移シテ

乙 A B C

卷一第二十八話

一〇七 16 詣ス

野乙 A B C

一〇八 2 奇異ノ思ヲ

野 B C (野 B C は奇)

6 為ニ

乙 A B C

卷一第二十九話

一〇八 11 舍衛國

A B C

13 發テ

乙 A B C

13 為ニ乗ル軍馬乗ル軍

底北野乙 B (Bは馬の下にニイと朱鋪 底北野乙 Bは象)

14 如此テ

乙 B

15 負ヌ

諸

一〇九 3 摩竭提國

A B C

- 3 劣ラハ 乙ABC
- 5 集メ 乙ABC
- 8 捕ヘラレ又 ABC (C傍訓マタ)
- 9 无限サテ AB
- 10 佛ニ申サク ABC
- 11 大王ノ 乙ABC (Bはノにナシイと朱傍)
- 11 籴ヲ以 「籴ヲ以」B (籴イと左朱傍)
- 12 報スレハ 乙AC Bは脱
- 一一〇 2 地テ 乙AB (Bは地に朱圈点)
- 2 双ヘテ 乙ABC 「又ヘテ」底北野大 (又は異体 北は双と傍書)
- 4 可為ト 乙ABC
- 7 螺 諸 (底地は変)

卷一第三十話

- 一一〇 16 或時 野乙ABC
- 一一一 2 踏敏レナムトス 底野

卷一第三十一話

- 一一一 12 過ス程ニ 野乙ABC
- 12 近隣ノ 乙ABC

- 14 破テ 乙ABC
- 16 鉢ヲ取炊タル飯ヲ 乙ABC
- 一一三 3 今一升残レリ 乙B
- 3 白ク炊テ 乙AB
- 4 供養シ奉ラシト 乙AB
- 6 貝テ 乙ABC
- 7 小特 乙B (Bは特に壯歟と朱傍)
- 9 須達 野乙ABC
- 10 喜 ★「喜フ」乙AC 「善」B (喜イと朱傍) 「妻ヲ喜ブ」底北野大
- 11 无シレ並 ★「无並カリケリ」底北野大 「无並ヒリキ」乙A 「無^{ナカナラヒ}並リキ」C 「並ヒ无シ」
- 11 倍セリ 乙ABC 「倍倍セリ」底北野大
- 12 心ノ内ニ 乙ABC
- 13 一生ノ間 AB
- 14 太子有リ 乙ABC
- 15 草樹前後ニ 諸
- 一一三 1 隣国ノ 野乙ABC
- 7 満量テ 北野乙AC
- 8 取後ニ 乙AC

一一四 3 我許ニシテ

乙ABC

4 一塵ナクトモ

ABC (クにBはり歟、Cはりと朱傍)

6 汝ト我ト中

乙ABC (Bは中の右下にニ、Cは我トの下にカ 中の下にニと朱傍)

6 美物ヲ

野ABC

6 乞給ハムコソ

乙ABC (Bのムはン)

8 汝

乙ABC

8 我

乙ABC

13 供養シ奉ラムト

底北 (底はラにテと朱傍)

14 帖テ

乙A

16 白テ言ク

乙

一一五 5 今日

乙ABC

5 貯ヘ无キニ

ABC

9 財宝

乙ABC

卷一第三十三話

一一五 12 佛養絲語

乙B (Bは糸供養佛得記別イと朱傍)

13 人駟ル、ヲ

ABC (人の下にCはニと補入、Bは不審紙を押ししたり)

15 懸テ

乙ABC 底北野 (底北野の懸は貝×糸)

一一六 3 佛ト

諸

卷一第三十四話

一一六 9 施ス心无シ

乙ABC 「施スニ心无シ」底北野大

11 飜スス事

★「飜ス事」乙ABC (乙Aの飜は変) 「飜ル事」底北野大

11 拾シメテ

ABC

12 佛尚門ニ立給ヘリ

乙ABC

16 成ス

底乙

一一七 3 无ニ依テ也

乙ABC

3 供養シ奉ラハ

ABC

5 乳ヲ

諸

6 受給フ

諸 (底の給は変 絡に近し)

8 其ヨリ後ニ

乙ABC

8 乳ヲハ

野乙ABC

卷一第三十五話

一一七 15 此伎樂ヲ

野

卷一第三十六話

一一八 10 生シテ

乙ABC

11 一二ハ

乙ABC

13 五二ハ

ABC

13 涅槃ヲ

諸(底の涅槃は変 旁の上は口)

卷一第三十七話

一一九 5 若シ

A B

6 数シハ

底北野乙B (Bは数にシハイと朱傍)

6 噉テムトス

A C

7 聞キ

乙A B C (Bはキを朱括弧で囲みイと朱傍)

9 佛ノ

乙A B C

卷一第三十八話

一一〇 1 廻シテ

乙B C (乙B Cは廻)

1 命

諸(Bの傍書今)

7 任セリシ時ニ

B

8 三寶ノ物トテモ

野乙A B C

8 慈悲在マス

乙B C

9 不蒙

乙A B C

15 如此ノ

乙A B

15 手足ノ

A B C

三、おわりに

『今昔物語』巻一の本文の異同を見ると、彦根城博物館所蔵『今昔物語』と同じ表現を多くもつのは内閣文庫本A B Cと東大本乙である。中でも内閣文庫本Bは、彦根城博物館本とのみ一致する箇所が多い。これは、『説林』53号で論じたのと同じ傾向にあるといえる。しかしながら、旧日本古典文学大系の底本である東大本甲や東北大本、野村本とのみ一致する箇所もあり、彦根城博物館所蔵『今昔物語』は、流布本系諸本（内閣文庫本A B C、東大本乙）と古本系諸本（東大本甲、東北大本、野村本）の間の状態を有する希有な本であるということがいえる。それは、彦根城博物館所蔵『今昔物語』が古本系諸本と流布本系諸本の間をつなぐ本であるということであり、『今昔物語集』がどのように流布していったかという謎を解く鍵がこの本にあるということでもある。

但し、『今昔物語集』の本は、巻ごとにその古態性が異なる場合が多い。従って、今後は、他の巻についても順番に分析を進め、同時に彦根城博物館所蔵『今昔物語』の実態的な成立のありようを解明したいと考えている。

注

- 1 中根「未紹介本『今昔物語』（彦根博物館所蔵）についての一考察」（『愛知県立大学説林』53号 二〇〇五年三月）
- 2 本稿の中で引用した旧日本古典文学大系の校異は、『今昔物語集二』山田孝雄 山田忠雄 山田英雄 山田俊雄 岩波書店 一九五九年によるものである。